

【季刊限定】 神聖かまってちゃん
と映画「渴き。」 ———女の
子の絶望の果て果てしなき世界

クソ底辺

神聖かまってちゃんと映画「渇き。」

———女の子の絶望の果て果てしなき世界

"ある時代が狂って見えるのは、見ている人間が混乱しているからだ"

ジャン・コクトー

2014年に公開された映画『渇き。』は冒頭、このジャン・コクトーの詩が映し出されてはじまる。

公開当初からネットでは否定する感想が目立ったこの映画。たとえば、「金かえせ」「時間かえせ」「途中で出ようかとおもった」などがあつた。じじつ、わたしも劇場へいったとき、前にすわっていた女性2人組がとちゅうで席を立っていった。うんこをふんばるときのパワーで目をこらすと、茶髪のギャル風味だつた。

イケメンンン～！って行ってあっちこっち向くおまえらは今年度最強夏映画『エイトレンジャー2』でも観てキャツキャいってろクソオンナが！

しかし、わたしも主演である役所広司に「うぐっ！」となる場面があつたのは事実。とはいえ、そんなことで席をたっていたらオシャレ(?)トレンド感がある村上春樹の作品なんて読めたもんじゃないだろうに。

あらすじはこうだ。元刑事の藤島は娘の加奈子が失踪したと知らされる。

あらすじなんてこんなもんでいい。



劇中、役所広司と時系列をズラして加奈子の同級生である「ボク」が物語の主人公となって物語を進行させる。「ボク」は加奈子のことが好きだった。すこし話しかけられたことで夢中になってしまう。

しかし！あろうことか加奈子はそれを自覚していた！たとえばこう。「今日、みんな集まるパーティーがあるんだけどどうかな？わたしの好きな人と同じになりたいんだよね」という誘い文句をつかう。選択肢がひとつしかない。女でも男でも「ぐぬぬ…」となってしまいうだろう。

怖い！！青春期の女の子がじぶんに自覚的であることがどんなに怖いことか。青春期の男の子とおなじく不安定であることがどれだけ身の危険を遠ざけているか。それが分かる。

どういうことかという、たとえば、男子が女子に抱きつけば一瞬にして男子の人生は台無しになる。ところが、女性が男子に後ろからぎゅっと抱きつけば男子はたちまちその子のことを好きになってしまう。そうでなくても男子がその女子を訴えるということはないだろう。

赤ちゃんがその時期、かわいさの全能感をもっているなら、青春期の女の子はその時期、性的な全能感をもっている。つまり、ロードオブナイトメアとつながっている絶対てきな力が備わっているのだ。もっとかんたんになると、スペックが最強なのだ。でも彼女らは力のコントロールが未熟なので覚醒することはない。全能感を出せないのだ。

「ヴァルキリープロファイル」におけるヴァルキリーであるし、「ドラゴンボール」における孫悟飯である。

映画『渇き。』は青春期の女子がもしも自分のスペックとそれの引き出し方に気づいてしまったらという話なのだ。

映画を観てもらえればわかるが、その力はすべてのものを癒した。加えて、すべてのものを破壊

した。加奈子は世界を滅ぼす力を発揮した。

これはどういうことか。たとえば、加奈子は「ボク」を癒すことのできる唯一のにんげんだった。同級生になぐられて傷だらけになった顔に加奈子は飲料水のCMみたいにスカッと話かけて、青春ドラマのような心地よさを「ボク」に与えた。

しかし、誘われたパーティーで「ボク」は【人間の尊厳】を踏みにじられる行為を受けてしまう。加奈子がそれに関わっていたことを知った「ボク」は絶叫する。「ボク」の人格はすっかりすり減ってしまい、居場所がわからなくなった加奈子を追跡する。時系列をべつにして役所広司とおなじく加奈子を追跡するのだ。

それ以外にもじぶんの力を引き出しできるようになった加奈子は多くのものを手中におさめていた。それは国家権力ともつながってしまう。17歳の女子がである。17歳の女子だからこそできることだ。じつはわたしも含めてみんな気づいているはずである。少女・女子こそ世界を変革する力があると。たとえば、宮崎駿は女性のナウシカを主人公にして世界の崩壊とぶつけた。

オタク的想像力かなんなのかはわからないがこれは続く。庵野秀明の『新世紀エヴァンゲリオン』（94）では軟弱な少年にたいして「しょうがないじゃん。わたしはたたかう」という惣流アスカラングレーと、「ただ戦うだけ」という綾波レイが描かれる（綾波レイは後半から「守るため戦う」と自分の戦いの意義を見いだす）。それは10年代になっても続き、虚淵玄が脚本した『魔法少女まどかマギカ』でも少女は「くたばれ!」とやってくる世界に戦いを挑んだ。

とはいえ、世界という圧倒的なものに男も挑むことができる。でも、世界を変革するほどのドライブ感がない。

少女がじぶんの全能感を知り、自身の力の引き出し方を知ったならその力で世界とケンカ売っても戦える、そんな気がしてるからアニメの監督や視聴者は少女が戦うものになぜか説得力を感じてしまうのではないか。すくなくとも男が主役の主人公だとなぜかいま説得力を欠いてしまう。（それはまた今度の話に）

ここで合わせて思い出してほしい。じぶんの全能感に覚醒したナウシカ（原作）は最終的に世界を殺す選択をする。『新世紀エヴァンゲリオン劇場版：Air/まごころを、君に』で綾波レイはシンジの意志に従って世界を滅ぼした。劇場版の魔法少女まどかマギカでは暁美ほむらは世界を一新した。

彼女たちは本来もっているものに自覚的になっただけだ。そしてそれを踏まえてものごとを選択したとき臨界点を超える力をもった。同時に世界を滅ぼした。

『渇き。』の加奈子もじぶんに自覚的になったとき、世界を滅ぼした。この意味は劇場で映画を観ることに尽きる。が、そんなことでこれは終われません。

少女であるじぶんに自覚的になると力は手にはいるが、破壊の力も付いてしまうというのがさっきの話だ。それはいつてしまうと自身の性的な自覚である。

それをもってミュージシャンとなっているのが元ジュディアンドマリーのYUKIと椎名林檎だろう。彼女らほどじぶんの見せ方をわかっているにんげんはいない。

加えて、わたしはそこに神聖かまってちゃんのみさこが入ってると思っている。

たとえば、みさこは自身がおこなう配信でとてもフラットである。



これはなかなか出来ることではない。なぜなら、他のニコニコで配信しているにんげんをみると、ニコニコ動画特有のある定型なしゃべり方があったりする。それがたとえば「ゆっくりしてね」などの来場者のコメントにたいすることばである。相互のコミュニケーションが魅力のニコニコ生放送だから、流れてくるコメントにたいして配信者がそのように反応するのは当然だ。しかし、その定型ことばやニコニコ独特の作法からにじみ出てくるのは、常にじぶんを気にしている自意識である。

じぶんを良く見せよう、少なくともくれくらい良く見せよう、こうしたらこう見えるかな、というような自意識がニコニコ動画の配信者からは見え隠れしてしまう。自然体を装っていてもである。

しかし、みさこはそれとはちがってフラットなのだ。ニコニコ特有の文法ではなく、自分自身をまっとうにカメラに写そうとしている。当然良く見せようと思っている部分はあるだろうが、それを感じさせない。

素直さという言い方もできる。でもそれは突き詰めると、一種の絶望感や諦めなど、心に闇をもっているにんげんでないと出来ないだろう。なぜなら、自意識を隠そう隠そうとしていてはレンズからそれが滲み伝わるものだからだ。

じぶんに自覚的でないと、みさこの素直さ、フラット感は出ない。とはいえ、じつはフラットかどうかはどうでもいいのだ。「フラットに見える」というのが重要なのである。

フラットさは自分に自覚的でないと出ない。自身の声、顔面、しゃべり方、趣味、趣向、コンプレックスそれらをあえていうならひとつひとつ諦めてかないと出ないものだろう。だからこそ感情が揺れてもフラットでいれるのだ。

人はじぶんに持ってないものを持っているにんげんに憧れや好意を抱くという。その理論でかんがえてみる。ふつうはじぶんにたいして諦めがつかないものである。諦めたとしていてもどこかで諦めきれてないものだ。しかし、フラットさをもっているにんげんは自身のあれこれにあきらめをしたにんげんである。ふつうの人がもっていないものをフラットなにんげんは持っていることになる。つまり、フラットなにんげんは他の人がもっていないものをもっているから、魅力的であるのだ。

思えば加奈子もフラットだった。同級生からはハツラツとした印象で好かれ、その飾らなさで同性からも好意を受けていた。

諦めは諦めるほど下に潜ってある地点でマグマの鉱脈に突き当たる。それは大地を揺らして地面

を割る。灰で空の色は染まり、日の光もさえぎる。世界をまるごと作り変えるエネルギーである。絶大な力だ。破壊の力でもある。

その力を使うには諦め続けた果て、ある一点だけの諦めきれない願いがひつようだ。ナウシカならば人間性の希望。綾波ならシンジの生きていたい世界の成就。まどかなら絶望で終わらせない世界。加奈子なら愛。

さいさんいうが、自覚的なにんげんでないとその力は宿らない。

みさこの自覚的な見せ方のその力をの子は見抜いている。神聖かまってちゃんはみさこから出る推進力でぐんぐんといろいろなボーダーを踏み越えていく。